



東京

第一国立銀行

凡ソ慣行ノ事ハ縦々其宜ヲ得サルアルモ俄ニ之ヲ匡
 正ス可ラス若シ卒然其匡正ヲ促カハ當ニ其効ヲ見サ
 ル耳ナラス其弊却テ全局ノ事物ヲ擾乱セシムルニ至
 ラン惟ルニ本邦官金ノ出納ハ維新ノ創ノ際ニ於テハ
 別ニ其制規ヲ設立スルノ餘暇ナキヨリ従前ノ慣行
 ヲ以テ三井小野島田ノ共立スル一會ニ委託シ御用為



114
 A1146

第一国立銀行頭取澁澤榮一謹テ

天正十一年四月
 天限侯爵邸寄贈



替方ノ名ヲ以テ一般ノ收入ヲ掌ラシメ之ヲ其立會ノ庫
中ニ貯藏シ官府ノ費途ニ應シテ其度支ヲ處辨セ
シメ而シテ僅ニ出納ノ總額ヨリ差引殘額ノ計算ヲ
見ルコトヲニシテホタ以テ其成則ノ觀ルニ足ルモノナシ且其
成規ナキモノ特リ大藏省ノミニアラス諸官省月額
ノ費途ニ於ルモノ多クハ三家ノ請求ニ任セラ之ヲ命シ
而シテ猶整然タル例規ノアラサルコトシ

明治四年七月廢藩置縣ノ令發シテヨリ全國ノ

租稅悉ク大政府ノ下ニ收拾スヘキヲ以テ各縣治
下ノ官金ヲ收入シテ之ヲ東京ニ運輸スルノ際ニ於ル
モ毎縣出納ノ事務多クハ三家ノ請求ニ從ヒ便宜
之ヲ許可シテ其事ヲ處セシムルヨリ三家俄ニ各地ニ
支店ヲ設置シ且夥多ノ官金ヲ寄托セラルルヨリ誤
ラ暴富ノ想ヲ為シ從來各自ノ營業ノ例格モ自
ラ變更シ其官金ノ運轉ニ際シテ各自自家ノ贏利
ヲ謀ルヨリ通商工業至ラサル所ナク終ニ全國ノ融

通商業ヲシテ三家ノ進止ヨリテ影響ヲ生セシム
 ルニ至ル是レ乃チ三家ノ營業ニ於テ條規例格ノ
 據ル可キナキニ座スルト云レ抑亦官府ノ夙ク其流弊
 ラ洞見シラ之カ制規ヲ設立シ漸ク其慣行ヲ匡正
 セサルノ過失ナシト云フ可ラス是レ榮一ノ深ク憂慮スル
 所ニシテ曩曩職ヲ大蔵ニ奉スルノ日モ亦嘗テ思惟ス
 ル所アリト云レ方拙ク識乏シキヲ以テホタ其匡正ノ方
 法ヲ建案スルニ至ラサリシ

明治六年五月解綬ノ後直ニ此銀行ノ創立ニ從事
 シ官金ノ出納ニ於テハ殊ニ調整ノ方法ヲ案シ其條
 規ヲ誤ラスレテ營業ヲ確實ナラシメント欲シ乃チ先ツ三
 井小野兩家ニ謀リ其事ヲ承継シ嘗テ大蔵省
 ヨリ兩家ニ指令スル處務約書ノ如キモ更ニ此銀行ニ
 領收シ且此銀行ノ當務ハ條例ニヨリテ常ニ紙幣
 寮ノ検査ヲ以テ唯官金出納ノミナラス百事正經
 ラ基トシ漸次其業擴伸シテ以テ併資者ノ企望ニ

充ラ聊國家理財ノ萬一ヲ裨補セント欲シ故ニ銀
 行細大ノ事務其創起ヨリ以テ今日ニ至ル迄審
 カニ思ヒ委シク考フテ日夜黽勉シ遂ニ進趨ニ向テ簿
 記計算モ亦少シク整理スル所ヲ得ルニ至ルハ實ニ
 閣下銳意勸奨スル所ノ賚ニシテ栄一カ深ク之ヲ感
 謝スル所ノ者ナリ

明治七年冬小野島田関店ノ變ナルヤ其原因ヲ尋
 繹セハ之ヲ官金出納ノ檢束ニ於ルト云ハサルヲ得ス此

時ニ當リ栄一私ニ自ラ以テ為ク三井ノ如キモ又或ハ此
 禍機ヲ同フセント因テ此銀行ノ行務改正ヲ案シ
 テ書ヲ以テ之ヲ閣下ニ聞シ尋テ併資者ノ集議ヲ
 催シテ之ヲ決定シ自ラ不能ヲ觀ニス銀行頭取ノ
 職ニ當リ全般ノ責任セリ幸ニ官府此匡正ノ
 要旨檢束方法ノ綴ナルト閣下ノ此銀行ヲ愛
 護スルノ厚キトニヨリテ銀行ト三井トハ聊其堵ニ
 安ニスルヲ得タリ尔來一年ニシテ此銀行ノ行務

ハ更ニ二層ノ進捗ヲ得其利益計算元大ニ増殖シ現ニ本年一月ノ報告ニ於テハ起業以來ホタ曾テ見サル所ノ額ニ上レリ

然リト云氏ノ案一席ニ官金出納ノ事務ニ於テハホタ安ニスルアラサルヲ以テ約書更正ノ事ヲ閣下ニ稟候セシニホタ其草案ヲ具シテ閣下ノ覽閱ニ供スルニ暇アラスレテ昨年十月頃ニ納金局建置之令アリ其事務固ヨリ約書ノ條款ニ係リ

大ニ銀行ノ營業ニ関涉スルアルヲ以テ其支出ノ方法ニ於ルモ亦官府ニ收拾セラレ官金ノ出納ハ悉ク官ノ處辦ニ歸スルヤヲ思惟シ亦之ヲ閣下ニ稟候スト虽氏ホタ其旨ヲ知ル能ハスシテ本年二月又實金局設置ノ令アリ是則案一カ當テ憂慮シテ其匡正ヲ計リ而シテ其ホタ全ク能クセオ所ノ者ナリシカ今此令マリテ官金ノ出納悉ク官ノ手ニ般セハ其汎濫ノ弊ヲ防クニ於テ充分ノ節度ヲ

得へレト云氏然レ氏今俄ニ此令アルハ采一亦サレク
 疑惑ナキヲ得ス如何トナレハ此銀行ノ如キ其處
 務ノ順序タル常ニ官ノ調査アリテ其承認ヲ
 得サレハ之ヲ行フ能ハス且貸借計算ノ事モ
 時々其實況ヲ点檢セラレ情實ノ正確ナルモ寄
 托ノ官金ニ於テハ亦他用ニ供セストセサレハ一朝其
 金額ノ完納ヲ要セラル、ニ當テ又其蹶躓ナキ
 ヲ保セス故ニ今此令ニヨリテ其寄托ノ金額ト

附任ノ事務トヲ奉還セント欲セハ速ニ此銀行
 ノ營業ヲ鎖シラ之ヲ收拾スルモ尚半歳若シクハ
 九ヶ月ノ時間ヲ乞ハサルヲ得ス然リ而シテ三井ノ
 如キハ其寄托ノ金額銀行ニ數倍シテ之ヲ他
 方へ使用スルモ又銀行ト同シカラサレハ之ヲ數年ニ
 延及セサレハ其完納ヲ期ス可ラス然則官府ノ此
 令ヲ行フニ於テ銀行ニ急ニシテ三井ニ緩ナル處
 置ナカル可ラス只銀行ニ於テハ聊其還納ノ期

ヲ緩フシテ之ヲ完了スルノ實アリト云氏俄ニ其運
 用金額ノ減少スルヲ以テ内來融通澁縮シ必
 マ宮業ノ効ナキニ至ラン固想スレハ明治四年廢
 藩置縣ノ令アリテ全國ノ租稅斂聚ノ事ヲ
 三井以下各個ノ商估ニ寄托セシヨリ今茲九
 年ニ至リ僅ニ五年ヲ経テ其間方法規則
 幾多ノ更革マツテ而シテ檢束ノ制日ヲ逐テ其
 精密ヲ加エ以テ今日ノ嚴肅ニ至リ民間貸借

ノ澁滞スル商法ノ不便ナルモ亦日一日ヨリ甚ク
 シ恰モ官令ノ檢束ト影響背馳ノ觀ヲ為ス
 ニ至ル然則此檢束ノ良制却テ全國ノ融通ヲ
 否塞スルカ抑亦別ニ原アツテ然ル歎榮一未タ其
 實因テ亮知スル能ハスト云氏今試ニ之ヲ較量ス
 ルニ本邦通貨ノ額ハ既ネ壹億七千万圓ニ出
 サルヘクシテ其間金貨ノ輸出アレハ今日ノ現額ハ紙
 幣銀銅貨ヲ通算シテ一億三千万圓以下ナル

可シ而シテ其官ニ屬スルノ金額ハ毎歲六千万
 圓ノ巨額ニシテ其出納ノ事務全ク官ノ行為
 ニ歸シ取テ高品ニ附シテ之カ融通ニ充テシテ
 六既ニ聚リテ之ヲ散スルノ時間ハ歲中五六
 ヲ超ルヘシ是ヲ以テ其六千万圓ハ半歲ノ間運
 用ノ途ヲ塞カン且本邦ノ民情ノ如キ其所有ノ
 金ハ各之ヲ藏匿スルノ故習アルト確實信スキ
 ノ銀行ナキトニヨリ純然タル高估モ亦多ク其資

本ヲ已レノ庫中ニ貯藏スルノ弊ナキヲ得ス況シヤ
 華士族農工ノ如キハ更ニ運用ノ方法ニ拙ナク徒
 ラニ之ヲ閑却スルヲ以テ之際笑セハ其庫中ニ藏
 匿スル所ノ総額ハ必ス四千万圓ニ下ラサルヘシ故ニ通
 債ノ合計ニ於テハ尙億六七千万圓タルモ實ニ高
 工ノ業ニ投スルノ額ハ僅ニ三四千万圓ヲ超ヘサレハ
 其融通ノ壅塞スル亦謂ナキニ非ルナリ今國家
 經濟ノ眞理ヨリ之ヲ熟思セハ榮一ノ愚固ヨリ

其言ヲ釣ル可ラスト云凡湏ラク官金聚散ニ
 於テ其閑却ノ期ヲ短クシ勉テ高工ノ物品ニ
 投セシメ以テ之カ運用ヲ資ケサル可ラサル者トセシ
 然而シテ今日官府ノ此令アルハ聊カ榮一ノ見ト
 異ル所アルニ似タク榮一ノ淺見薄識此實
 因ヲ誤見スルカ抑亦官府ノ別ニ見ル所アリテ
 先最後寛ノ制ニ出ントスルカ是レ實ニ榮一カ
 此官金出納ノ方法ニ於テ始メ其檢束ノ制

ルヲ喜シテ後ニ其急促ヲ憂ヒ卒然慣行ノ
 一ヲ匡正シ却テ理財ノ要旨ヲ失スルニ至ラシテ
 恐ル、所以ナリ然リ是レ財政ノ根理ニシテ全
 般ノ融通ニ關シ敢テ銀行一部ノ小々事務
 多クサルハ今之ヲ叙スルハ固ヨリ贅言タルヲ免レ
 スト云凡既ニ此方法ノ更革ニヨリテ銀行三
 井及ヒ他ノ官金ノ出納ニ従事スル者均シ
 ク其繫累ヲ免ケルヲ以敢テ閣下ニ一言ヲ呈セントス

今也既ニ此業令アリテ銀行ハ將ニ其衝ニ當リ
且ク向來ノ營業ヲ審察セサル可ラス於是乎
此銀行ノ實況ニヨリ寄托ノ官金ヲ完納シテ尚
營業ヲ繼續シ得ルヤ否ヲ熟思シテ其更革ノ
要件ヲ開申シ以テ閣下ノ高旨ヲ仰キ而シテ
此願請ノ許允アラシト云凡若シ官
府此官金收拾ノ要旨ニ於テ聊モ假貸スル所
ナク縱令三井ノ如キ此檢束ニヨリテ小野島田

ト其轉ヲ同フスルニ至ルモ敢テ顧ミサル所トナシ榮
一夙ク其目的ヲ銀行鎖業ニ轉シ速ニ其處
置ヲ為スヘキニ交レ然リ而シテ此銀行目下ノ
景状ニ於テ榮一其鎖業ヲ深ク憂惜スル所
ナリ冀ク閣下之ヲ諒察セラレ慣行ノ俄ニ匡正
ス可ラサルノ理ニ據リテ榮一ノ願請ヲ聽容シ此
銀行ノ營業ヲシテ今日ニ維持スルヲ得セシ
メラレヨ榮一烟款ノ至ニ堪ヘス再拜

東京

第一圖 金行